

本徳寺灯籠会における 歴代御影奉懸について

亀山本徳寺では、毎年お盆の時節、(八月十三日・十四日・十五日)の三日間、御堂を切燈籠で荘厳し、歴代御影を両余間に奉懸して、歴代の法義相続のご苦勞を偲ばせて頂くと共に、仏徳を顕彰して参りました。これを「燈籠会」と呼び慣わしております。この行事は本山本願寺でも古くから執り行われており、寺外に公開することなく、寺内でのみ勤めるのが習いでした。起源は江戸期のころに遡ると思われませんが、お念仏の教えを相續された歴代先達のご苦勞とご恩に報いるために、今の門主が歴代善知識の遺影を余間壇にご安置してその遺徳を顕彰する事が趣旨と思われまふ。(盆や正月に先祖の霊を意識して、仏や神になつたご先祖をお迎えするという古い神道的な祖霊信仰とは内容を異にしていることに注意したいものです。)

当初は、本願寺門主一族を中核においた伝統的宗門の身内的な行事であつたように推測できます。近世にいたつて本願寺一門が制度的に固定化して行く過程で公的な色合いを帯びてきたことは間違ひありません。しかし、あくまでも本願寺の行事であります。一方、本徳寺は形成以来、播州では本願寺一門として機能して来たため、本願寺と同様な行事をすることが多くあります。その一つが本徳寺の「燈籠会」というわけです。

さて、本徳寺では、本願寺歴代御影と本徳寺の歴代御影を隔年ごとに代る代る余間壇に奉懸しています。平成二十三年は本徳寺歴代の御影がかけてられています。本願寺歴代がご安置された余間と尋常にご安置している内陣脇壇を全体として外陣から眺めてみると内陣に親鸞聖人と本願寺歴代(一般寺では蓮如上人)を引き続いて余間には本徳寺歴代が並ぶわけで、本願寺一門の法統相続の視覚による具象的表現が実現しています。

ちなみに本願寺歴代は親鸞・如信・寛如・善如・綽如・巧如・存如・蓮如・実如・証如・顕如・准如・良如・寂如・住如・湛如・法如・文如・本如・広如・明如・鏡如・勝如です。本徳寺の歴代は実玄・実円・実勝・証専・顕妙・准専・准圓・寂圓・寂宗・住最・法静・法依・本間・広浄・広要・昭道となります。燈籠会中に安置された御影をご覧いただき当時のお念仏相続の歴史に思いを巡らせていただければこの上ない事でありまふ。外陣からこれらを拝察すると本徳寺の歴史的特性が今に蘇ってきます。(本徳寺では長い年月の間に欠損が生じています。本願寺歴代では4幅、本徳寺歴代では6幅が欠損しています。)なお、本願寺と本徳寺の間では歴代の相互入寺が見られます。参考までに「本願寺／本徳寺歴代系譜」をご覧ください。

